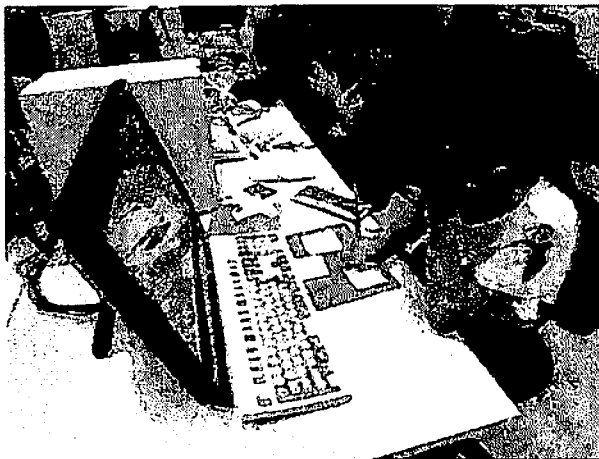


第69次印旛地区教育研究集会
(社会科教育・小学校)

研究主題

地域社会の一員として考え、表現する社会科学習の在り方
～聞き書きマップを使った防災教育を通して～



成田市立向台小学校
大平 あゆみ
吉原 清司

1 研究主題

地域社会の一員として考え、表現する社会科学習の在り方
～聞き書きマップを使った防災教育を通して～

2 主題設定の理由

(1) 学習指導要領から

本単元は、学習指導要領第4学年の目標及び内容に基づいて設定したものである。(資料1) 学習指導要領の改訂に伴い、今まで第4学年「くらしを守る」で扱われていた「火事からくらしを守る」と「事故や事件からくらしを守る」が第3学年に移行し、第4学年では「災害からくらしを守る」という単元が新設された。地域社会における災害について、消防署や警察署などの関係機関に従事する人々が地域の人々と協力して、災害から人々の安全を守っていることや関係の諸機関は相互に連携して緊急に対処する体制をとっていることを見学、調査したり資料を活用して調べたりしていく。災害に備えて活動している人々や地域の人々の工夫や努力から、地域社会の安全を守るために自分たちにできることは何かを考え、表現することが求められている。

(2) 印教研社会科学研究部研究主題より

よりよい社会の実現に寄与する「生きる力」を培う社会科学習
～自ら課題をみだし、自らの考えを実現できる児童生徒の育成を目指して～

本研究は、印教研研究主題を受けて設定している。副題にある「自ら課題をみだし、自らの考えを実現できる児童」とは、身近に起きるさまざまな事象を自分事として捉え、それに関わる地域の取り組みを知り、地域の一員としてよりよい生活を考え、実践する姿と考えた。児童が事象に対する情報を集めたり、必要な情報を選んだりしながら、自分の生活との関わりに結び付けて考えていくことで、主題に迫ることができるであろう。

(3) 児童の実態から(4年1組 37名)

本学級の児童は、35名が社会科の学習が好き、どちらかというところ好きと答えていて、学習への意欲は高い。理由としては、社会科見学に行くことや授業や見学から学ぶことが好きだからというものが多し。また、これまでの生活経験から知っていることや写真などの資料から見つけたことを出すときにはホワイトボードを活用して意見の集約をはかっている。そのこともあってか、グループで話し合うことに対する抵抗感は少なく、いろいろな意見を出したり、友達の意見で理解を深めたりして新たな気付きにつながっている。

本単元の事前に行った実態調査においては、地震が起こった時にどのような行動をとるかという設問に対して「テーブルの下に身をかくす」「落ちてこない・倒れてこない場所に避難する」というような学校または建物内で起こった際の行動を答えるものが多く、一次避難後の行動については見通しをもていない実態が明らかになった。また、地震が起こった時の地域の取り組みについては知らない児童が30名いた。災害に対しては起きた後の行動に目が行きがちであり、事前の「防災」に対する意識は低いようである。そのため、学習を進める上で地域の安

全を守るための市の取り組みや関係機関の組織的な連携、協力の在り方を捉えていく。さらに、表面的な捉えにならないように、防災に関わっている地域の人々の思いや願いを聞くことで「守ってもらえて安心だ」という考えではなく「地域の一員として自分たちは何ができるのか」「よりよい地域にするためにはどうすればよいのか」と積極的に地域社会に関わろうとする態度を育てていきたい。

3 主題について

昨今、成田市のみならず、各地で地震を含む災害が頻発している。学校内では、地震が起きた時を想定して、避難訓練を実施し、いつ地震が起きても児童自らが安全に身を守る行動をとれるように努めている。しかし、学校以外の場所ではどうだろうか。学校の中と同じように、自分で判断し、場に応じた適切な行動がとれるだろうか。市は市民を守るための設備を整えたり、訓練計画を実施したりしている（公助）。また、地域でも町内会等で避難訓練を実施したり、消防団として協力したりしている（共助）。公助・共助の働きかけを実感させるとともに、自分にもできることはないかという自助の意識を高めていき、グループごとにまとめ、表現することで家庭、地域へと防災についての情報を発信していきたい。自助・共助・公助それぞれがつながっていることに気付かせながら、子どもたちも地域の一員として重要な存在であることを実感させていく。

4 研究の目標

地域の防災への取り組みや意識、現状を知ることで、児童自ら課題をもち、地域の一員としてよりよい地域を目指すために考え、表現できることを、実践を通して明らかにする。

5 教材開発について

学習指導要領では、自然災害から人々を守る活動についての学習で身に付ける事項を示している。現代社会の仕組みや働きと人々の生活について考えるにあたり、関係機関や人々が自然災害に対し、様々な協力をして対処してきたことや、今後想定される災害に対し様々な備えをしていることの理解やその働きを考え、表現していくことが求められている。

自然災害の例としては、地震災害、津波災害、風水害、火山災害、雪害などがある。単元を構成するにあたっては、過去に県内で発生したもので、児童にとってより身近で体験したことのある地震災害を取り上げた。その中で防災の観点から、市役所の防災情報の提供や備蓄倉庫の設置等が整備されていること及び消防署や警察署、地域の町内会等と協力していることを学び、災害が起きたときに自分自身の安全を守るための行動の仕方を考えたり、自分たちにできる災害に対する備えを考えたりできるようにしていく。

導入の「見出す」段階では、児童に課題意識をもたせるために過去に起こった災害を事例に取り上げ、地震はいつ起こるかわからない、実態調査からその時を考えた備えが十分でないことをつかませる。「自分で取り組む」段階では「聞き書きマップ」を使って、自分たちの住む地域には災害に対しての備えとして十分な設備があるのか、地域の人たちの災害に対する意識はどの程度かその実情を調べていく。「広げ深める」段階では、ゲストティーチャーを招き、防災に対する具体的な取り組みを学んだり人々を守ろうとする思いに触れたりする。そこから、

市・地域が災害に備えての対処や防災の取り組みに努めていること、相互に連携して対処する体制をとっていることなどを実感させ、自助・共助・公助の関係性を考える。「まとめ上げる」段階では、現状の取り組みで広めたいこと、または批判的な見方から出てきた課題をクリアするためにどのようなことができるかを考え、発表・提言していく活動を組み込んだ。それぞれが災害に対する意識を高め、連携する大切さや児童一人一人が地域の一員として、何ができるか、関わっていけるかを考えるようにした。学区内の防災対策の設備や活動を知ることから、自分には何ができるか考えさせていきたい。

6 研究の仮説及び手立て

【仮説1】

身近な地域の防災への取り組みを知ることによって、防災への価値観を養ったり、批判的に見たりすることができるようになり、地域の一員として自分に何ができるか深く考えることができるだろう。

手立て ゲストティーチャーを招き、地域を災害から守る活動について知る。

ゲストティーチャーとして市役所の危機管理課の職員、避難所開設に携わる地域の人等をゲストティーチャーとして迎える。それぞれの立場で災害が起こったときの対処や防災への取り組み、その思いについて直接話を聞くことで、関心を高められ理解を深めることができると考えた。また、調べ学習を通して出た疑問を追究するためにも有効な手立てであると考えた。

【仮説2】

課題解決に向けてさまざまなツールを活用することで、児童の思考が深まり、もしもの時に何をしたらよいか考えられるだろう。

手立て1 「聞き書きマップ」を使って、自分の住んでいる地域の実態を把握する。

導入の段階で、向台小学校が避難所になっていることを知る。また「ハザードマップ」を見ると、市内には多くの避難所が設定されていることに気付かせる。そのことから、自分を中心として、学校、学校の周り、住んでいる地域、市と視点を広く捉えさせていく。実態からは、自分の住む地域には防災について備えている設備についての認識が低かったこともあり、「聞き書きマップ」を使ってフィールドワークを行い、自分たちの住む付近にある避難所を訪れたり、災害に対する防災設備を探したりする。その道中では地域住民にインタビューをし、それらの情報をもとに地域の災害に対する意識を踏まえ、課題解決につなげていく。

※「聞き書きマップ」とは（資料4）

国の研究機関である科学警察研究所犯罪行動科学部・部長であった原田豊氏（現・立正大学法学部教授）が自主防犯活動等を行っている方々のために開発した「まちあるき」記録作成支援ツール。記録を地図として手軽に作成することを目的に開発されたものである。

① GPS受信機、②ICレコーダー、③デジタルカメラの3つの道具と組み合わせて使う。

フィールドワークに出た際に、紙にメモする代わりに音声で録音しておき、あとでそれを「聞き書き」した文字データを、現地で撮影した写真や歩いた経路のデータとともに、地図データの形で保存できるツール。

手立て2 自分が得た情報や分かったことをまとめるために、思考ツールを使う。

・Yチャート

家庭で個人が調べてきたことを、まとめる時に使用する。情報の集約、整理をして、そこから感じたこと、必要だと思う「自助」の活動を考える根拠とする。

・関係図

自助・共助・公助の関係について、相互の連携や自分たちの生活とのつながりを関連的に考えることができるようにまとめていく。「自分」をどこに位置付けるか話し合うことを通して、自分との関わりにおける考えを深められるようにする。

7 単元構成図



8 実践研究



(1) 単元名



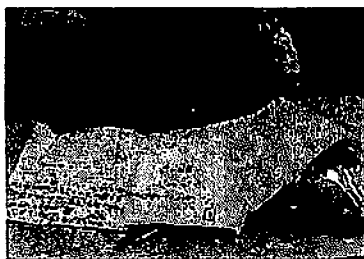
くらしを守る「自然災害からくらしを守る」

(2) 単元の目標

- ・地震からくらしを守るための関係機関の働きと関係機関は地域の人々と協力する取り組みについて理解し、防災活動の様子について必要な情報を集め、読み取り、まとめている。
(知識・技能)
- ・地域社会における地震から人々の安全を守る工夫や努力について知り、人々の生活と関連づけて考えたことを表現している。
(思考力・判断力・表現力等)
- ・地域社会における地震から人々の安全を守る工夫や努力に関心をもって意欲的に調べたり、地域社会の一員として人々の安全を守るための活動に協力したりしようとしている。
(学びに向かう力・人間性等)

(3) 指導計画 (12時間扱い)

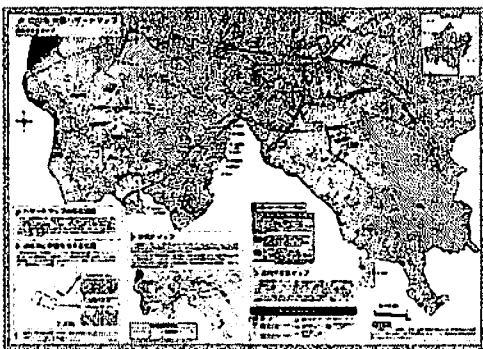
過程	学習活動と内容	期待する変容の姿
見出す 2	<ul style="list-style-type: none"> ○映像や資料を使って、地震は身近に起こる災害であることに気付く。 ○ハザードマップについて知り、どのような情報を得ることができるかを知る。 ○有事の時に市や地域がどのような活動をしているか課題意識をもつ。 	<ul style="list-style-type: none"> ○災害によって受けた被害から、身を守るための備えが十分であるかどうかを考えることができる。  <ul style="list-style-type: none"> ○向台小が避難所になっていることを知り、学区の周りには避難所はどのようなになっているか、調べようとしている。
	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> 地震からくらしを守るために、市や地域の人々はどのようなことをしているのだろう。 </div>	
自分で取り組む 4	<ul style="list-style-type: none"> ○聞き書きマップで学区内にある防災に関する設備を調べたり、地域の人にインタビューをしたりする。  <ul style="list-style-type: none"> ○家庭の防災についての意識や取り組みを調査する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○フィールドワークから、地域の防災に対する意識や備えを考えることができる。 ○避難所開設に携わる方の話を聞いて、避難所の役割について考える。 ○家庭での備え、災害に対して心配なことについて解決方法を考える。

<p>広 げ 深 め る</p> <p>3</p>	<p>○ゲストティーチャーを招いて、市で取り組んでいることや地域で取り組んでいることを考える。</p>  <p>○地震からくらしを守るための市や地域の取り組みについてまとめるとともに、自分（自助）・地域（共助）・市（公助）の関係をまとめる。</p>	<p>○市や地域の人々の自然災害から人々を守る活動やその思い、自分の生活との関わりについて考えることができる。</p> <p>○自助・共助・公助について理解し、グループや学級で考えを共有する。</p>
<p>ま と め あ げ る</p> <p>3</p>	<p>○防災に向けて学んだことから、自分でできることを考えたり、地域に提案したりする。</p>  <p>○防災について、自分の考えをまとめる。</p>	<p>○防災に対する取り組みを広めたり、安全なくらしを守るために何をしたらよいかを考えたりすることができる。</p>  <p>○自助・共助・公助の関係を考えながらまとめる。</p>
<p>地震からくらしを守るために、市では情報の提供や防災倉庫の設置、連絡体制の整備をするとともに、地いきの人々は自主防災組織の活動や防災訓練を行っている。そして、災害に備えて自分にできることを考え、市や地域とつながりをもっていくことが大切である。</p>		

9 授業の様子

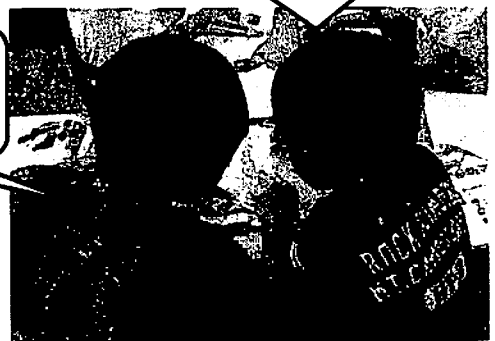
(1)「見出す」の過程

○映像やハザードマップを使って



向台小学校も避難所になっていて、周りにも何か所もあるな。

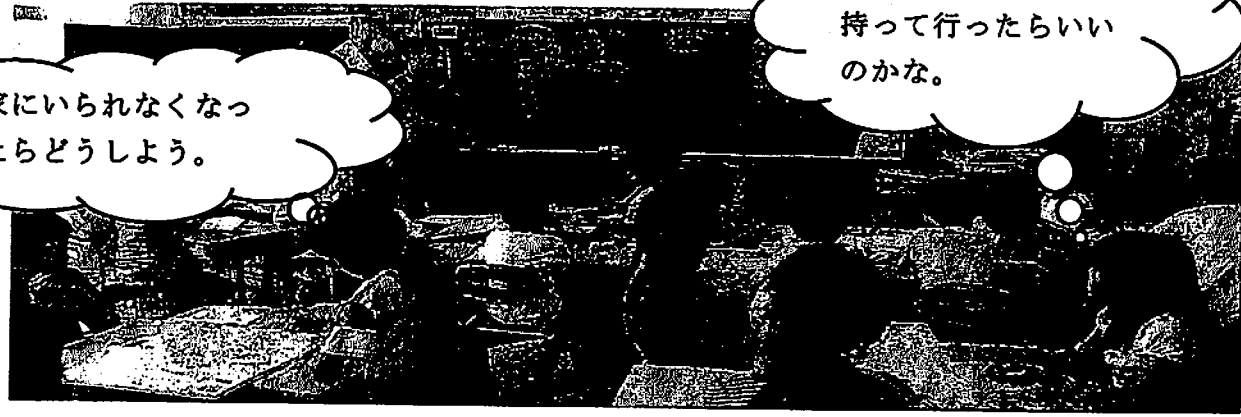
他に載っている情報は何だろう。



○地震が起こったときに困ること 課題の設定

家にいられなくなったらどうしよう。

避難したときに何を
持って行ったらいい
のかな。



(2) 「自分で取り組む」の過程

○地域へ出て確かめる。「聞き書きマップ」

市役所の防災課の方々



中学校の防災倉庫は
小学校のものよりも大
きいなあ。



どのように避難所開設の連絡が
来るか、みんなに教えたいな。



防災無線が近くにあって、周りの住人によく聞こえるね。

家で災害に備えて用意して
いるものを見せてください
ました。



自分の住んでいる地区だ
けど、避難訓練をしてい
るとは知らなかったな。

地域の防災施設はどのくら
いあったかな。

○「聞き書きマップ」をまとめる



この方は、災害に備えてどんなこ
とをしていると言っていたかな？
インタビューを確かめよう。



(3)「広げ深める」の過程

○ゲストティーチャーの話

各地区の代表者が集まって、
会議をしています。

自分の学校でこんな
訓練をしているとは
知らなかったな。



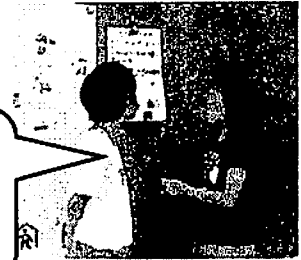
(4)「まとめあげる」の過程

○発表に向けて

地震に備えて、この情報も
載せておこう。



ゲストティーチャーが言っていた避難
訓練をポスターで知らせて、参加を呼
びかけよう。



○発表にて

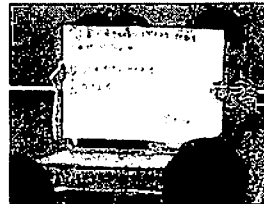
劇



壁新聞



紙芝居



地域の方・保護者を招いて



10 仮説の検証

【仮説1】

手立て ゲストティーチャーを招き、地域を災害から守る活動について知る。

ゲストティーチャーには、成田市役所防災課の職員と向台小学校区避難所開設委員会・会長の伊藤さんを招いた。

防災課の職員からは「公助」に関する部分として、災害が起きてからどのようにして市民へ連絡・情報が提供されるか、市内に置かれている防災倉庫について説明していただいた。子どもたちにとって遠い存在にある市役所の働きについて、直接話を聞いたり、質問をしたりすることで取り組みやより早く市民に情報を届けたいという思いを知ることができ、距離感が近くなった。

地域の防災施設を見学することを通して子どもたちは、学校で行う避難訓練と同様に地域でも防災に向けての訓練をしていることを知った。さらに、向台小学校区避難所開設委員会・会

長の伊藤さんから、現在行われている活動について話してもらうことで、防災に対する理解の深まりとその後の発表会で伝えたいことの明確化につなげることができた。

【仮説2】

手立て1 「聞き書きマップ」を使って、自分の住んでいる地域の実態を把握する。

「聞き書きマップ」を使うことによって、地域に備えられている施設の位置の全体を知ることができた。また、インタビューと写真の組み合わせから、聞き直しができるので、地域の人々の防災に関する備えや取り組みについていつでも振り返ることができた。さらに、フィールドワークで自分の調べた範囲だけでなく、他のグループの「聞き書きマップ」の結果を比べることができたので、共通点や他の地域住民の防災に対する備えに気付くことができた。



いろいろ家を見て、地元の活動などは、人が
している人は少ない。2. 備えをしている人が多くて
た。でもいろいろ備えをしようかなと思いました。

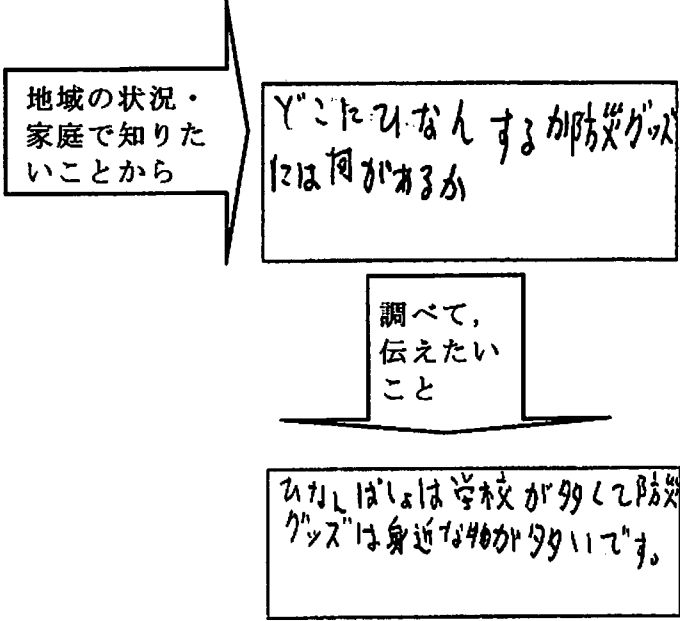
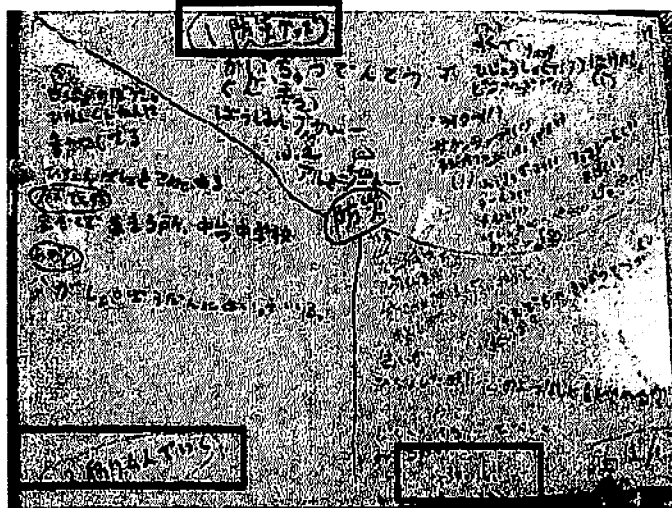
フィールドワークを終えた児童からは、「聞き書きマップ」を用いて行った地域住民のインタビューから、防災活動に参加している人が少ないことへの課題意識を持たせること（1）や、自分や家庭では備えが十分足りているかと考えること（2）ができた。

手立て2 自分が得た情報や分かったことをまとめるために、思考ツールを使う。

情報の整理のために「Yチャート」や「関係図」を使った。また、話し合いの場面では、グループでホワイトボードを用いて意見を書き出したり、まとめたりした。それをクラス全体で共有することで、課題の明確化や考えの可視化、情報の発信方法の検討につなげることができた。



○Yチャートを使ったまとめ



研究主題

地域社会の一員として考え、表現する社会科学習の在り方
～聞き書きマップを使った防災教育を通して～

資料編

資料1	学習指導要領第4学年の目標及び内容	P 1
資料2	児童の実態と変容	P 1～2
資料3	教材について	P 3～4
資料4	「聞き書きマップ」について	P 5～6
資料5	ゲストティーチャーの話と児童の感想	P 7～8
資料6	「まとめあげる」段階の発表資料	P 9～10
資料7	ワークシートの振り返りに見る変容	P 11
資料8	引用・参考資料	P 12



資料1 学習指導要領第4学年の目標及び内容

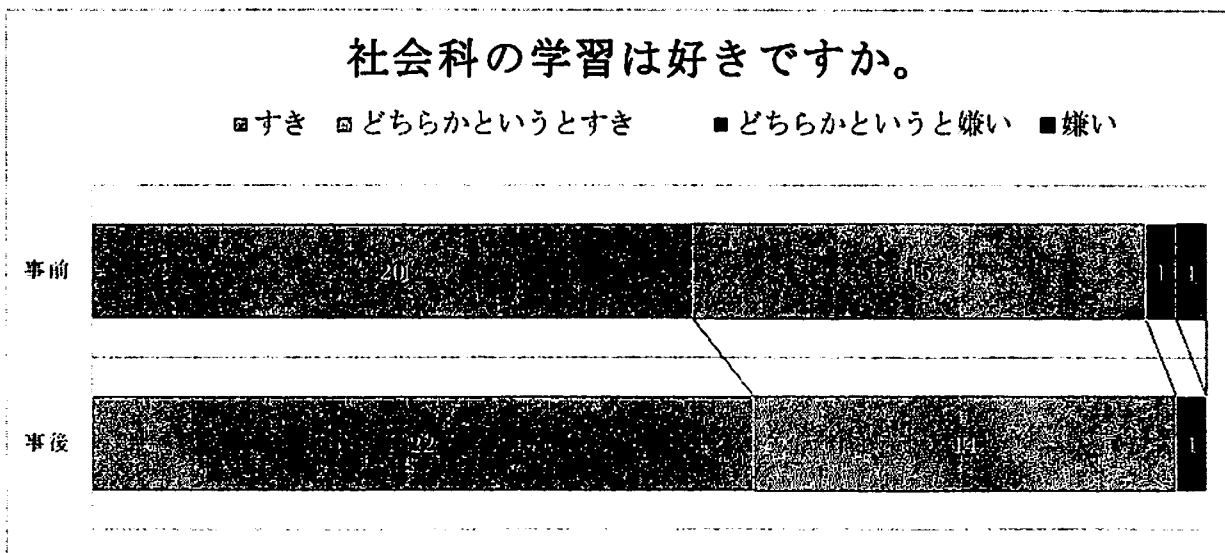
- 目標 (1) 自分たちの都道府県の地理的環境の特色、地域の人々の健康と生活環境を支える働きや自然災害から地域の安全を守るための諸活動、地域の伝統と文化や地域の発展に尽くした先人の働きなどについて、人々の生活との関連を踏まえて理解するとともに、調査活動、地図帳や各種の具体的資料を通して、必要な情報を調べまとめる技能を身に付けるようにする。
- (2) 社会的事象の特色や相互の関連、意味を考える力、社会に見られる課題を把握して、その解決に向けて社会への関わり方を選択・判断する力、考えたことや選択・判断したことを表現する力を養う。
- (3) 社会的事象について、主体的に学習の問題を解決しようとする態度や、よりよい社会を考え学習したことを社会生活に生かそうとする態度を養うとともに、思考や理解を通して、地域社会に対する誇りと愛情、地域社会の一員としての自覚を養う。
- 内容 (3) 自然災害から人々を守る活動について、学習の問題を追究・解決する活動を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。
- ア (ア) 地域の関係機関や人々は、自然災害に対し、様々な協力をして対処してきたことや、今後想定される災害に対し、様々な備えをしていることを理解すること。
- (イ) 聞き取り調査をしたり地図や年表などの資料で調べたりして、まとめること。
- イ (ア) 過去に発生した地域の自然災害、関係機関の協力などに着目して、災害から人々を守る活動を捉え、その働きを考え、表現すること。

資料2 児童の実態と変容

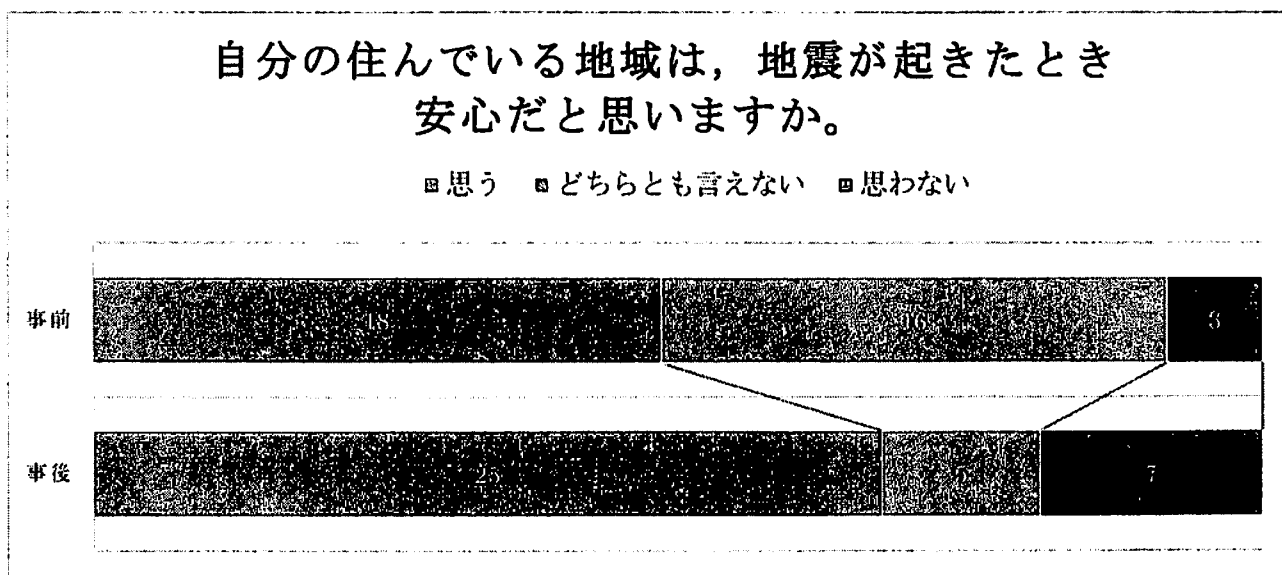
(1) 本単元の学習に関する実態調査 (男子16名 女子21名 合計37名)

- ①社会科の学習は好きですか。
- ・はい (20名) ・どちらかというが好き (15名) どちらかという嫌い (1名)
 - ・嫌い (1名)
- ②地震が起きたとき、どのように身を守りますか。(自由記述)
- ・テーブルの下に隠れる (24名) ・物が落ちてこない、倒れない場所へ隠れる (5名)
 - ・防災ずきんをかぶる (3名) ・頭が隠れる場所に隠れる (2名) 等
- ③地震が起きたとき、家庭ではどんな備えをしていますか。
- している (7名) していない (30名)
- ・非常用バック (3名) ・水 (2名) ・カンパン (1名) ・非常食 (1名)
- ④自分の住んでいる地域は地震が起きても安心だと思いますか。
- ・思う (18名) ・思わない (16名) ・思わない (3名)
- ⑤自分の住んでいる地域の防災への工夫を知っていますか。
- 知っている (7名) 知らない (30名)
- ・避難所 (3名) ・ペットボトルなどの用意 (2名) ・防火水槽 (2名)
- ⑥地域の避難所を知っていますか。
- はい (24名) いいえ (19名) 無回答 (4名)

(2) 実態調査の変容



学習後にアンケートを取ると社会が「好き」と答える児童が増え、また「嫌い」と答える児童が0人となった。これは、グループによる活動やフィールドワークにより、考えを深められたことが楽しかったためとのことであった。

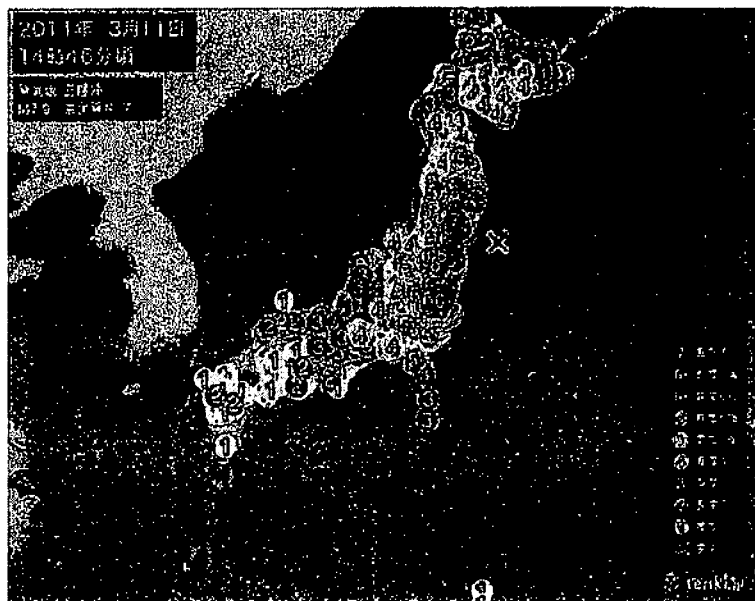


学習前では、安心だと思うと答えた児童が多かったが安心だと思える根拠は確かなものではなく、漠然としたものだった。また、安心だと判断する材料が少ないことから「どちらとも言えない」と答える児童も多くいた。

学習を通して、地域の活動や市の活動を知ることによって、学習後は、安心と思う児童が増えた。一方で、自主防災会の活動が行われていない地区もあることや防災に対する備えが十分ではないと考えたことで、まだ安心と思わない児童も増えている。事前で「どちらとも言えない」と答えた児童は16名いたが、学習後は5名に減った。それは、フィールドワークやゲストティーチャーの話聞く等の活動を通して、自分の考えを持つことができたからだと考えられる。学習により安心かどうかを判断する材料が増えたことにより、どの意見の児童も立場をはっきりさせて考えることができるようになった。

資料3 教材について

第1時 地震の様子（東日本大震災）



2011年3月11日の地震の様子についてその時の成田市の震度は千葉県内でも一番大きい震度6弱を記録していたこと、日本全体で揺れていたということなどを知って、子どもたちは驚きの声を上げていた。また、そのときの成田市の建物や道路の被害状況も提示した。

成田市内



成田市立図書館

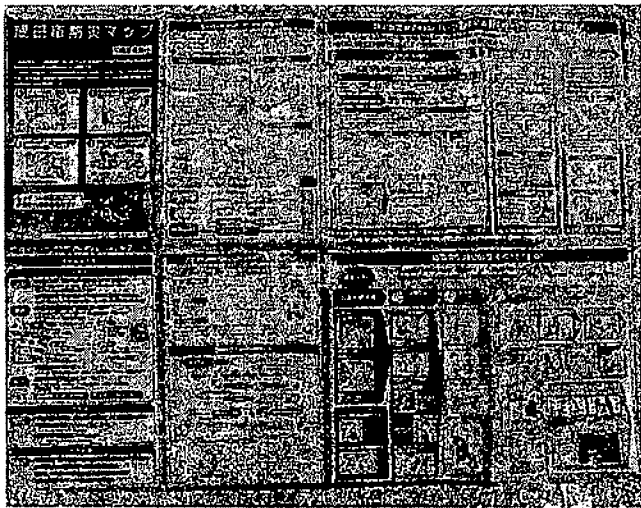
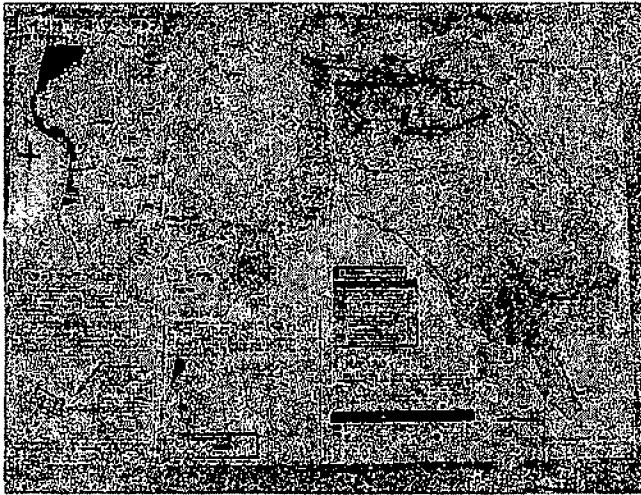


成田市内道路の様子



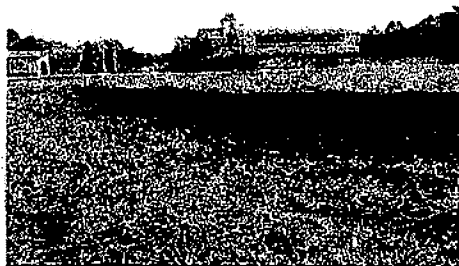
住宅街の様子

第1時 ハザードマップ 防災マップ



第3・4時 フィールドワークにて

地域住民へのインタビューの際に、地区内で活動している自主防災会の紹介や東日本大震災発生時の向台小学校のグラウンド状態の写真を見せていただいた班があり、フィールドワーク後に全体で共有した。



←グラウンドが割れている様子



自主防災ニュース

北中台自治会自主防災会
2018年 3月 1

3月16日(土) 13時から大ブレイクで防災講習会が開催されました。雨予報にもかかわらず、18名の方が参加されました。

講習は大災害時に防災本拠となる大ブレイクでのアートの立て方を学習しました。今回は雨・風よけになる横断の取り付けを実施しています。

続いて各家庭での避難食料の必要性、数量・保管方法(ローリングストック)の講習、及び主な避難食料の実際問題が行われました。尚、自主防災会では予備の備蓄で避難食料は一切保持していません。

その後、専任講師により三角巾の使用と救急手取り足取りで実践しました。

講習終了後、少人数ですが講習向け食料を頒布・調理し試食しました。本原(缶詰・漬物)、えいよちゃん(パック味噌)・ルン(炊入り)が好評でした。



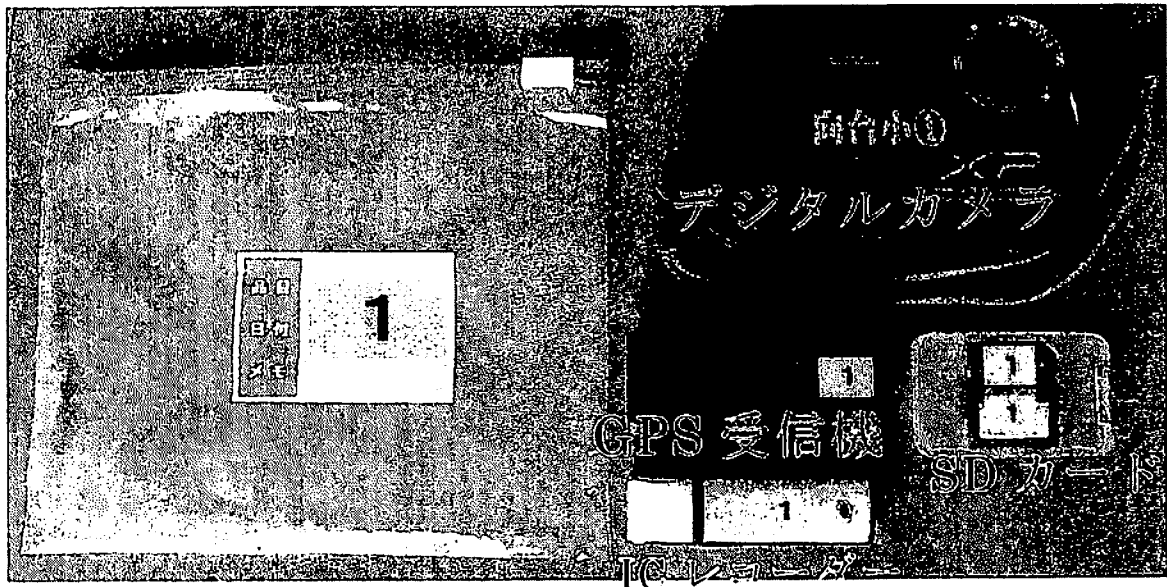
資料4 「聞き書きマップ」について

「聞き書きマップ」とは、町中を歩き、気付いたことをメモするかわりに音声で録音しておき、あとでそれを聞き書きしてデータにするためのソフトである。聞き書きした文字データを、現地で撮影した写真や歩いた経路のデータとともに、地図データの形で保存できるので、いつでもどこを歩いて、現地の状態がどうだったかがわかりやすくまとめられる。

●使用道具

①デジタルカメラ ② GPS受信機（ロガー） ③ICレコーダー

3つの道具を使うが、スイッチ類の操作も、出発するときにGPS受信機とICレコーダーをONにし、戻ってきたときにそれらをOFFにするだけである。



●フィールドワーク



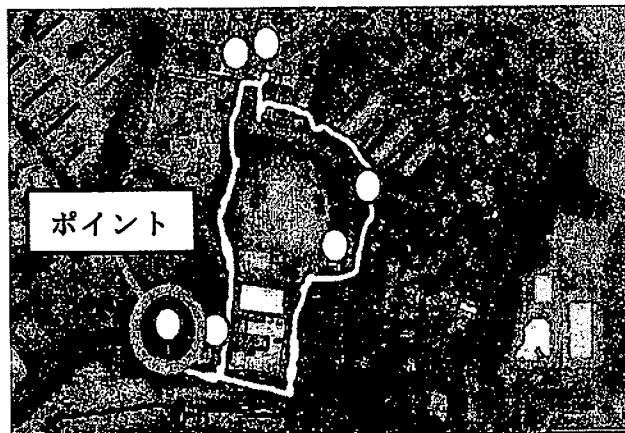
小学生では、地図と実際の場所を照らし合わせることが難しい児童もいる。本校でも、危険箇所の予想を立てさせたときは、イメージはあっても地図だとその場所がどこなのかわからないという児童が多かった。このツールは、歩いた場所、写真を撮った場所、そのとき何を言ったかが連動され、場所の特定が簡単にできる。また、地図を持つ必要がないので、慌ててメモを取る必要もなく身軽にフィールドワークに行くことができる。

●データを引き出す



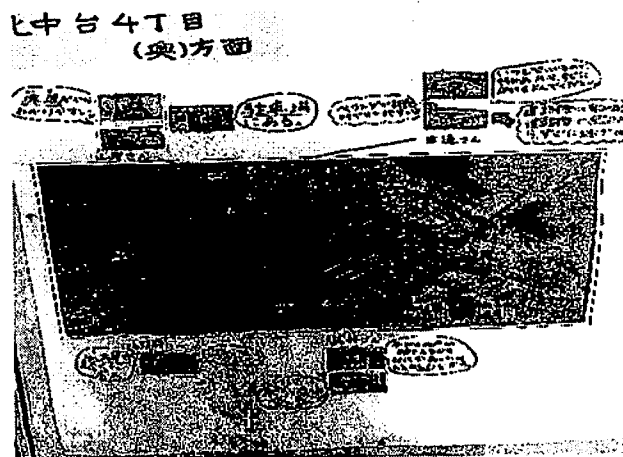
・「聞き書きマップ」は、フィールドワークから戻ってきた後に使用する。画面上で写真を選ぶと、現地でシャッターを切りながら「つぶやいた」内容を簡単に「頭出し」でき、録音された内容をまとめることができる。

- ・ポイントが画面上に出る。そのポイントからデータを引き出せる。
- ・地図上にフィールドワーク時に通った道がわかるようになっている。



●まとめのしかた

- ・「聞き書きマップ」のデータを基に児童が作成したもの。データを印刷し、それを基に情報を共有することができ、地域の特徴や改善点など捉えやすい。

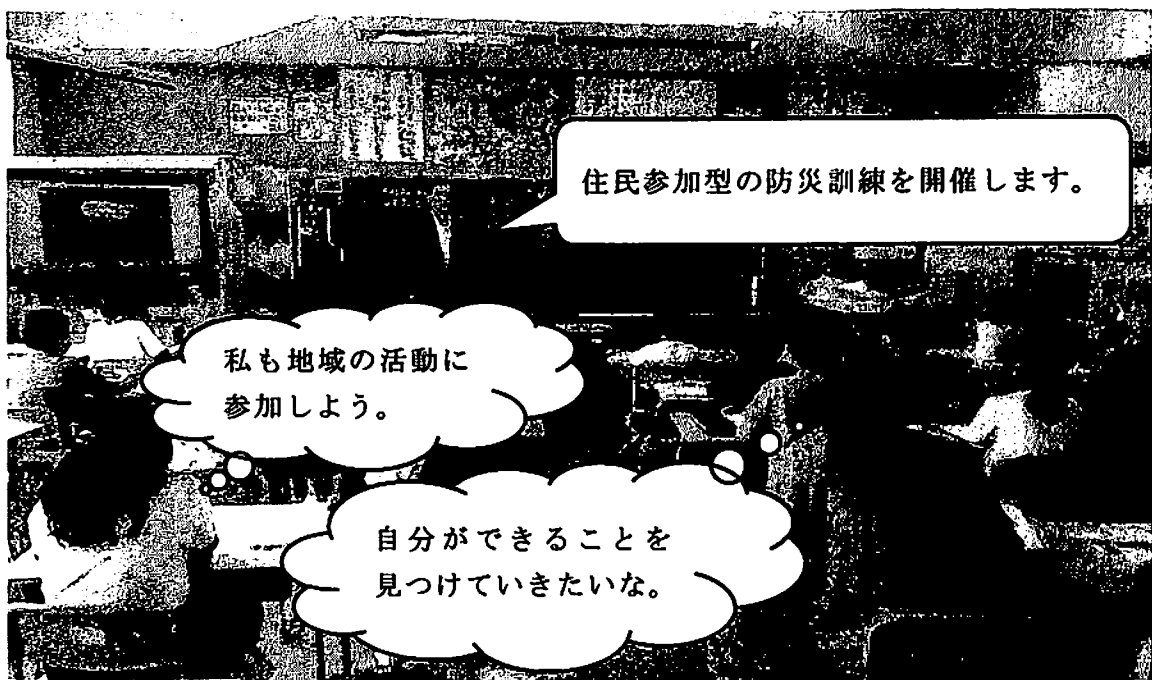


資料5 ゲストティーチャーの話と児童の感想

向台小学校区避難所開設委員会・会長の伊藤さんに、今現在、地域ではどのような防災活動に取り組んでいるか話をしていただいた。児童は、自分の身は自分で守ること、そして、地域の安全も自分たちで守っていくことを学んだ。



向台小学校区避難所開設に至った経緯や避難所開設委員としての取り組みについて話していただいた。避難所開設は地域によって、取り組んでいないことや向台小学校区での開設も日が浅いことを知った。また、学校の避難訓練と同じように予行練習をしていることや地域の方と市の職員が連携して取り組んでいることなどを知って児童は驚いていた。


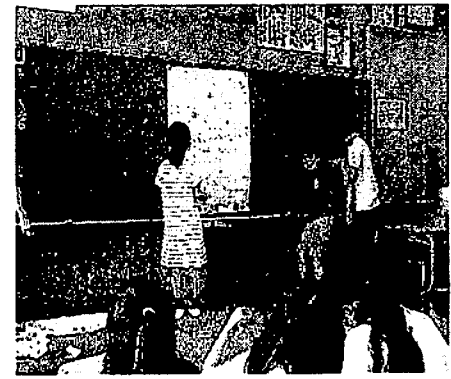
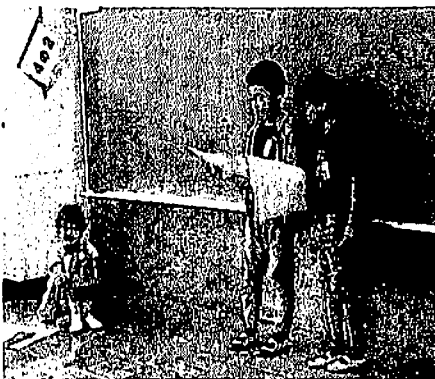
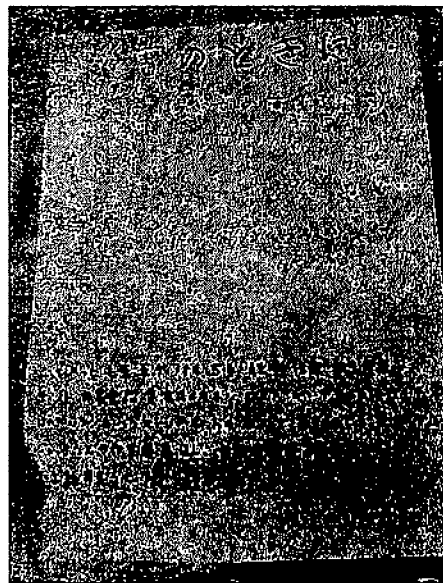
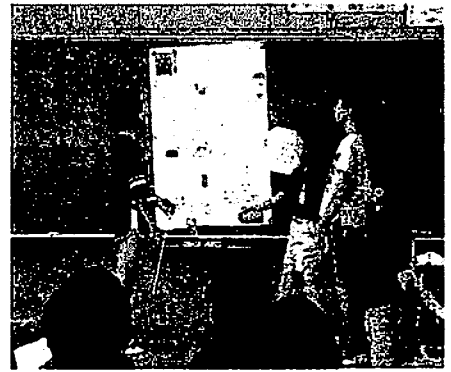


資料6 「まとめあげる」段階の発表資料

災害用グッズ大発表

<input type="checkbox"/> 印かん	<input type="checkbox"/> 現金つばね	<input type="checkbox"/> がい中巻の
<input type="checkbox"/> のりく	<input type="checkbox"/> ライター	<input type="checkbox"/> ちふくく
<input type="checkbox"/> 水	<input type="checkbox"/> ラジオ	<input type="checkbox"/> 電池
<input type="checkbox"/> げん金	<input type="checkbox"/> ナイフ	<input type="checkbox"/> かん切り
<input type="checkbox"/> (ほにやう)かん	<input type="checkbox"/> インスタントラーメン	<input type="checkbox"/> 食パン
<input type="checkbox"/> ちんちん	<input type="checkbox"/> いろいろ	<input type="checkbox"/> もうふ
<input type="checkbox"/> ヘルメット	<input type="checkbox"/> ぼうさいずきん	

☆みんなのグッズを入れておきましょう

各班今まで調べたことを劇や壁新聞、紙芝居、本、ポスター、チェックシートなどでまとめ、地域・保護者へ提案した。

「広げ深める」段階でゲストティーチャーから地域の活動の現状や今後の取り組みの話聞いた。その後の振り返りでは、「地域の活動に参加したい」と考えた児童は7名、「自助の取り組み」を考えた児童が2名であった。その後、「まとめあげる」段階で防災について自分の考えをまとめる時には、「地域の活動に参加したい」と考えた児童は20名、「自助の取り組み」を考えた児童が6名とどちらも約3倍に増えた。これは、学習を通して地域の活動がみんなの役に立つことが分かったり、自分でもできることがあることが分かったりしたことで、子どもたちが地域の一員としてこの事象を捉えられたからだろう。

地域・保護者の感想から

「防災」Eメールに、子供達もよく理解が深まった
と、発表している姿を見て、頼もしい感じました。

Eメールの笑い声、大人でも笑顔をこぼす姿が印象的

家には玄関に防災グッズが置いてあるのですが、

中のモノを確認、Eメールしてみました。

劇や紙芝居など工夫してとてもわかりやすかったです。

今後災害があった時の連絡方法や何を準備したら

いいか家族で話し合いたいと思います。

みんなとても良かったです!!

子供達がそれぞれにアイデアを考へて、楽しく

発表できていました。防災と聞くとなかなか

イメージですが、身近なものだと思いました。

私は、神戸と阪神大震災を経験しましたので、

とても関心が高いテーマです。私自身も自分の

経験を子供達にしっかりと伝えたいことを

思います。

ビジュアルでの発表も、ライブ劇も交えることで工夫が

ありました。それにより災害が起きた時どう行動するのかが

何を備えたら良いのか、一人一人に知識が定着したのでは

ないかと思っております。

また、私の知らなかり情報もたくさんあり、お調べありがとうございます。

なおと感心しております。(例:水は1人あたり1日3L必要

が、ミネラルウォーターが1本100円あるなど)

発表会に参加させていただきありがとうございました。

震災経験のない子供たちが想像しかかば、調べたことがよくわかりました。

起きやすいことを教へてあげ、もし大きな災害が起きた時には

落ち着いて今回のように話を聞いて行動してほしいです。

子供たちから作ってくれた災害用グッズキットも追加の活用

活用させていただきます。

今後ともどうぞ宜しくお願いいたします。

子どもたちの発表によって、家庭で用意している防災グッズを見直しするきっかけ作りになったようである。地域の訓練活動を知らせることができた。学習を通して、知り得た情報を広めるといことは、児童にとって地域の一員として活動する第一歩になった。

資料8 引用・参考資料

- ・『小学校学習指導要領解説 社会編』（2017）文部科学省.
- ・『学校防災のための参考資料「生きる力」を育む防災教育の展開』（2010）文部科学省.
- ・『学校安全参考資料「生きる力」をはぐくむ学校での安全教育』（2001）文部科学省
- ・澤井陽介（2016）『小学校 子どもの思考をアクティブにする社会科の授業展開』
東洋出版社.
- ・山下真一（2016）『「授業構造図」でよくわかる！小学校社会科はじめての問題解決的な授業作り』明治図書出版.
- ・黒上春夫 小島亜華里 泰山裕（2012）『シンキングツール～考えることを教えたい～』
NPO 法人学習創造フォーラム.
- ・原田豊（2017）『「聞き書きマップ」で子どもを守る 科学が支える子どもの被害防止入門』現代人文社.
- ・『初等教育資料 令和元年6月号』（2019）東洋館出版社.